

20240904 逃げることもできない！「難民」にもなれない！

前回まで、「難民」にスポットを当てて、実際に難民となってしまった方々の思いや、世界の実態、未来予測などについて述べてきました。

難民には、戦乱や気候危機などによって国そのものを追われる「難民」と、住む場所を追われ国内で移住を余儀なくされる「国内避難民」があります。「国内避難民」については、国境を越えていないことから、国際条約では難民として保護されません。それに対し、1991年4月、イラク国内におけるクルド人の国内避難民問題に対して、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）として前例のない保護を決断し、救いの手を差し伸べた緒方貞子さんのエピソードはあまりに有名です。

今でも世界では紛争が絶えません。

アフガニスタン、シリア、イエメン、ミャンマー、そしてウクライナ・・・国同士、国内の勢力争いなどと構図は様々ですが、紛争の数は増え続けているといえます。

その中の一つが、イスラエルのガザでの戦争です。ガザ地区の悲惨な状況は、報道でも日常的に伝わっていますが、現在ガザ地区の住民のほとんどが飢餓状態だといえます。医療機関も空爆され、施設も薬品も手に入らなくなっています。怪我や病気等で外科手術を施すにも麻酔すら満足にないと聞いたときは、ぞっとしました。



町が攻撃にさらされる中で、多くの人が住み慣れた家を捨てざるをえず、何度も避難を繰り返している状況です。

ガザ地区はイスラエルによって建てられた壁やフェンスに囲われていて、15年以上にわたって、「封鎖状態」になっています。外へのアクセスは極端に限定され、出られるのは国連やメディアで働く人、外国籍の人などに限られ、事前に調整したうえで、リストに名



前を載せて、待たなければいけません。その意味で、ガザ地区は“天井のない監獄”のようだとされています。

それでも、先日のパリオリンピックでは、ガザの選手8人もパレードに参加しました。パレスチナ五輪委員会のジブリル・ラジューブ会長は14日にあった壮行会で「選手の参加を通して、ガザで起きている悲劇を世界に伝えることになる」との談話を発表していました。

紛争の現状を知ることが、私たちにできることのひとつではないでしょうか。日本から離れた世界で起きている紛争は縁遠いことのように思えるかもしれないけれど、同じ地球で生きる者として、まずは知ることが大切です。無関心であることは、容認しているようなものだからです。